
モノクロxリンク

Asakkyo

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

モノクロ×リンク

【NZコード】

N2124Z

【作者名】

Asakkyo

【あらすじ】

平凡な人生に飽き飽きしていた高校生・山田ヒリュウは、ある日、白と黒の二色で創造された王国 モノクランスに迷い込む。モノクランスホテルで彼を待っていたらしい少女・モノックはどうやら彼を気に入つたらしく、彼を護衛にしてしまう。眠れない夜におすすめな壮絶バトルファンタジー。

プロローグ

その昔、現世を出た先にそれはそれは巨大な四角い透明な箱があつた。何も入つていらない箱。

その箱は、やがてある神に見つけられ、新たな世界を入れられた。箱の中に創造された新たな世界には、名前が付けられる。創造主である神 モノクレイは考えた。

「黒と白で出来た世界を創造したんだから……、モノクランスが良いだろ?」

後に、住人5000万の王国が出来、繁栄していくそれは、こう名付けられた。

神・モノクレイが創造した新世界 モノクランスと。

第1章 001（前書き）

第1章 001～第1章 002の書き出しがりここまで書きまあ。
他の作品より読みにくい構成ですいません……

第1章

あの日の夜。少年・山田ヒリュウはいつも通りにテレビの電源を入れて、好きなアイドルのニュースだけチェックして、いつも通りにお気に入りの iPodで好きなアイドルの曲をヘビロテして、お気に入りの雑誌を読んで休日の服装を考えて、クラスメイトで僕の片思いのあの子とデートする自分の妄想をついでにして……。そんな日常を謳歌していた。

彼は、その後どうしたかは忘れた。気付けば、じにに居たのだとモノクランス王国の中に。

彼・ヒリュウは、とりあえず、ペシャンこになつたスライムの如く地面に寝そべっているその体を起こして、辺りを見回してみる。振り向けば、そこには見た目17～18階建ての 外側の全ての面を灰色で塗りつくされた ひょろ長い建物が。

（ここはいつたい ？）

田を凝らしてじっと見つめる。表には、【モノクランスホテル】とある。

しばしじつとそのホテルを見上げてぽかんとしていると、白いスースを着た男の人に声をかけられる。

「君が……、山田ヒリュウなんだね？」

優しげに尋ねてくるあたり、この人はきっと紳士に違いないと思つたヒリュウは、素直に答えた。

「はい」

老紳士はにこつとすると、僕をホテルの中へ連れて行く。ロビーに来ると、老紳士はヒリュウに深々とお辞儀をすると、ビロかへ立ち去る。

ヒリュウはロビーに置かれた高級か否かのいまいち謎なグレーのソファに座り、居眠りをする。

その数分あとだった。

「あ」ヒリュウの背後で、聞いた感じでは16歳ほどの少女の声が。

「んみや……？」薄田を開け、声のした方を見る。

「やつぱりそつよ！」少女は、ヒリュウの背中に向かつて何やら叫んでいる。

少女はヒリュウの座るソファに向かつて走つてくる。距離にして25センチのところで立ち止まる。雪のように白い肌、線の細い容姿、とりわけヒリュウの目を引き付けるのは銀色の大きな瞳。ホテルの証明の光に反射して輝く銀色の美しい。

「貴方が、山田ヒリュウくんなのねえ？」田をキラキラさせながら見つめ、さつきの老紳士と同じことを聞く少女。

「えうだけど、何か？」ヒリュウは答えた後に悔しそうな顔をする。

今では好感度ガタ落ちじゃないか。感情をストレートにしてろくなことの無かつた僕のこれまでを思い出し、更にガツクリした。

「やつぱり、貴方がヒリュウなんだつたのねえ！」

頭を抱えてうずくまる少年の様子なんて華麗にスルーするどころか、少々馴れ馴れしい呼び方をしてくる彼女。少年はきっとじつ思つただろう。

何なんだコイツは。

ヒリュウと少女はエレベーターに乗り、グレーの27階まで上がる。

ヒリュウが、エレベーターのボタンを見ていると、少女が微笑む。後々、ヒリュウが名前を聞くと、少女はモノックというそうだ。

「初めて来たんだよね。あとでこの世界について詳しく説明してあげるわ。そのために、さつきの紳士に地図を用意させたんだもの」ヒリュウは、そつか、と軽く頷いた。

グレーの27階に着いた。

エレベーターの中の壁やボタンも扉も全てそのようだが、白・黒・グレーの三色しか使われていない。それはエレベーターを降りても同じで、床もドアも壁も天井も、照明も、この3色で統一されている。昨夜までは、赤や青やピンク、オレンジに緑、金とありとあらゆる色を無意識に、日常的に見ていたヒリュウにとつて、このモノクロな世界はとても異様なものに見えたはずだ。

「不思議でしょ？」

ヒリュウの前を歩くモノックが笑う。

「君の説明を早く聞きたくてワクワクしてるよ

「いつたい、どうなってるんだここは……？早くこの世界のシステムとか誰が創造したのかとか、知りたいな……。彼の歩くスピードが早くなる。

しばらく歩いた先に、その部屋はあった。ドアの色はグレー。早く、モノックが開けてくれ、先にヒリュウを中へ入れる。

「すげえ……。僕、色んなホテルに泊まってきたけど、ここまで地味な部屋は初めてだ」

あれ……？僕、変なこと言つた？モノックの顔が引き攣つて見えるのは何故なんだろうなあ。

「……まあいいわ」モノックの表情が変わる。

「説明を始めるわ！いい、しっかりと聞くのよ？一言も聞き逃してわいけないんだからね？いいかしら？」

人差し指を真つ直ぐこっちに向けて言つなよ。あ。……そうだ。ちょっと閃いたから、聞いてみるか。

「あのさ、もし一言でも聞き逃したら、僕、どうなつちやうの？」即答だった。

「教授の話によれば、この世界で死ぬことになつちやうじいわよ。でも、貴方なら大丈夫だと思つわ。モノクロタワーに上れるのは貴方ですもの」

最後の言葉、意味深だな。

「ていうか、早く説明しろし……」

待ちきれねえ。早くこの世界について知りたい。

「あ。ごめんごめん。では、始めるわ」

モノックの口から、この世界が語られる——。

第1章 002

「この王国が出来たのは、その世界が創造された後なの。王国の始まりはね、一人の少年と一人の少女がお互いを好きになつて、大人になつた時、王・妃になることを前提に神・モノクレイが二人を結婚させたのよ。そこまでは良かつた」だんだん、モノックが暗い顔になる。

「何だよ、恐いじゃないか。

「けど、何かあったの？」

「良かつたんだけど……、結婚してすぐの頃、二人は色の話で喧嘩をしてしまうの」

「喧嘩……？」

モノックが頷く。

「そう、喧嘩をしてしまうの。」との発端は、当時の王国の色についての話し合いなんだけれどね。その頃は白と黒しか色が無かつたの。ある日、王が王国を白一色にしないかと妃に提案したの。そしたら、黒好きな妃が怒つてね……。やがてそれは王国一のニュースになつて、ついに国民が色のことで戦争を始めてしまうの。これは後にモノクランス戦争といわれる、未だに続いている争いごとなのよ。これはね、白の領域に住む白の住人と、黒の領域に住む黒の住人が、白を好む王のために、黒好きな妃のためにとお互いの土地の面積を少しでも広く取ろうという思いから始まったの「一呼吸おいで、続きが話される。

「国民の争いが始まってしばらく経った頃、王と妃は国民の争いに心を痛み、王はやはり一色にしてようと改心した。そしたら、妃が白と黒の境界線を決めようとして言い出したの」

「そんなの、どうでも良くないか?と、僕は思つた。

「王はね、そんなの決まる分けないって言ったの。でも妃は決めたいって言ったの」

また喧嘩か……。

「今度は解決したわ。妃の、グレーといつ白と黒を混ぜた色を新たにつくつてそこに境界線を引こうつていう案でね。」

なんだそりや……。始めからわざわざ良かつたんじやないか。

「でも、土地の争いは無くならなくてねえ……。無くなるどじるか、あなたの世界で起きていたことが、じつりでも起きてるようだ……」

「どうしたんだろうねえ?」

Hレベーターに乗った時から、何となーくは気付いてたけど。「白の領域に住んでる者は家の屋根からテレビ、ラジオ、文字まで何もかも白に統一しなければならないといつ白の領域条例と、黒の領域に住む者は何もかも黒で統一しなければならないといつ黒の領域条例つていうのが出来たのよ」

「誰がそんな条例を……」

「国民の間で何十年と続く戦争を見てきた王と妃よ」

色のことでそんなに長いこと争つなんて……呆れてものも言えないよ僕は。そもそも、争いなんて起つるのがおかしいんだ。この国には譲り合ひの精神は無いのかね……。

「まあ、じの王國で長じこと続く土地の取り合ひの話はおこして。次の説明をするわね。」

第1章 001（後書き）

会話文で終わるかと思っていたら、と思いましたが、この辺で区切りますね。

自分の文章力の無さに泣けます。orz

次こそはもつと高めな文章力で皆さんに楽しんでいただけるよう頑張ります。

彼とモノツクは、一度ホテルを出ると、まずモノツクの言つモノ、クロタワーに向かう。ホテルからモノクロタワーまでは距離が短く、数分で着いた。

「ほほう。これがモノクロタワーか」

そこには高さおよそ数百メートルはありそうな、巨大な白黒のチエツク模様の塔が聳え立っている。

「…こういうのを見て真っ先に探すのは入り口。

ヒリュウは白と黒の間にあるグレーの扉を見つけた。

「ねえ、あれって入り口だよね？入つてもいいのかな？」隣にいるモノツクに尋ねる。

「ダメよ。そこに入るのは王と妃とあの塔の最上階に住んでるモノクランサーだけだもの。あ。モノクランサーっていうのはね、この世界に生まれ育った者のことをいうのよ」

「…モノクランサー、か。現実世界より、こっちの世界のが面白そうだな。

「へえ……。それじゃあ入るのは諦めるか。……で、ここに僕を連れてきたというからにはそれなりの話があるからだろう。どんな話かな？」

モノツクの口から語られるこの塔にまつわる話を早く聞きたいのか、ヒリュウはそれとなく急かした。

「それは、今から数年前のこと。一人の少女がこの塔 モノクロタワーにやつてきたの。その少女はもちろん、モノクランサー。名前はドメイン。彼女は幼い頃に、あのモノクランス戦争に巻き込まれて、両親と逸れてしまつたの。それからしばらく一人でモノクランス王国を歩いて、下宿先を探したの。でも、誰も彼女を泊めようとはしなかつたわ。仕方なく街中を歩くことを続けていたら、この塔 モノクロタワーの前に辿り着いたのよ。ドメインは迷わず

その中に入つて、中にある階段をひたすら上つて、上つて上つて、上り続けて、最上階を目指したの。最上階に着くと、そこには何故か手紙が置かれてあつたの。それは、何も書かれていない、白い紙だつたんだけれどね。彼女は気にはせず、床の上に寝て、一晩過ごしたわ。次の日の朝、目が覚めたら、モノクロタワーの上のほうにある丸い形をした窓に、大きな黒猫の顔があつたの。黒猫は言ったわ。
しばらくそこで暮らしなさい。そうすれば、一人の勇敢な人間が現れる。彼と秘密の契約を結んだ時、君に良い知らせが舞い込むことだろ？。って。ドメインはその言葉を信じて、再び眠りに入つたの。その日以来、彼女は今も眠り続けているわ、あなたの到着を待ちながらね」

ヒリュウは頷く。

「なるほど。だんだんと見えてきたぞ。

「どんなモノクランサーなんだろうなあ、そのドメインさん。会つてみたいけど、それは僕がこの王国で大活躍してからなのか。
…よし、わかった」

モノックが先を歩く。

「じゃあ、次の目的地へ行くわよ」

…次の目的地にはどんなエピソードが込められているんだろう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2124z/>

モノクロxリンク

2011年12月16日22時54分発行